(19)日本国特許庁(JP)　(12)公開特許公報(A)　(11)特許出願公開番号
特開2013-106694
(P2013-106694A)
(43)公開日　平成25年6月6日(2013.6.6)

(51)Int.Cl.			F I			テーマコード（参考）
A47C	7/64	(2006.01)	A47C	7/64	A	3B084
A47C	7/38	(2006.01)	A47C	7/38		

審査請求 未請求　請求項の数 3　ＯＬ　（全 9 頁）

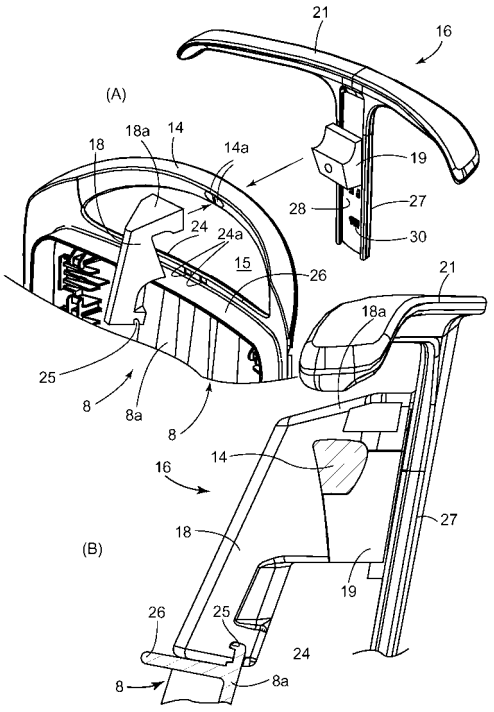
(21)出願番号　特願2011-252470 (P2011-252470)
(22)出願日　平成23年11月18日 (2011.11.18)

(71)出願人　000139780
株式会社イトーキ
大阪府大阪市城東区今福東１丁目４番１２号
(74)代理人　100099966
弁理士　西　博幸
(74)代理人　100134751
弁理士　渡辺　隆一
(72)発明者　佐藤　宏樹
大阪市城東区今福東１丁目４番１２号　株式会社イトーキ内
(72)発明者　橋本　実
大阪市城東区今福東１丁目４番１２号　株式会社イトーキ内

Ｆターム(参考)　3B084 DB13

(54)【発明の名称】椅子

(57)【要約】
【課題】背部の上端に把手部を設けている椅子において、ハンガー装置を高い支持強度で取り付け可能とする。
【解決手段】椅子は背アウターシェル８を有しており、背アウターシェル８の上端に把手部１４を設けている。ハンガー装置１６は、背アウターシェル８の本体部８ａと把手部１４とに跨がるように配置された第１及び第２サポート部１８，１９と、これらに昇降自在に装着されたハンガー体２１を有する。把手部１４は第１及び第２サポート部１８，１９で前後から挟持されており、第１サポート部１８の下端は本体部８ａに嵌まっている。第１サポート部１８が把手部１４と本体部８ａとに突っ張った状態になるため、ハンガー装置１６は極めて高い支持強度を有する。把手部１４にはビス挿通穴を空ける必要はないため、ハンガー装置不使用時の美観悪化防止対策も不要である。
【選択図】図３



【特許請求の範囲】
【請求項１】
背部の後面を構成するバックサポートの上端に、人が手で掴み得る把手部を、前記バックサポートの本体部から上向き又は後ろ向き若しくは両方に突出した状態に設けており、このため、前記把手部と本体部との間は上下に開口した空間になっている構成であって、
ハンガー装置又はヘッドレスト若しくは他のオプション品を取り付けるためのオプション品取付け部を、前記空間を横切るように配置しており、前記オプション品取付け部を前記バックサポートの本体部と把手部とに取り付けている、
椅子。
【請求項２】
前記オプション品取付け部の前端又は前端を前記本体部の上端に嵌合させていると共に、前記オプション品取付け部の後端部又は上端部で前記把手部を挟持している、
請求項１に記載した椅子。
【請求項３】
前記オプション品取付け部は前記把手部の後ろにはみ出ており、このオプション品取付け部のうち前記把手部の後ろに位置した後端部に、前記ハンガー装置の支柱を昇降自在に装着している、
請求項１又は２に記載した椅子。
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本願発明は、背部にハンガー装置等のオプション品を取り付け可能な椅子に関するものである。ここに、オプション品としては、ハンガー装置やヘッドレストの他に、荷物下げ用フックや荷物収納カゴなどが含まれる。
【背景技術】
【０００２】
椅子の背部にハンガー装置等のオプション品を取り付けることは広く行われている。他方、背部の上端に人が手で掴み得る把手部を設けることも行われている。そして、背部の上端に把手部を設けた椅子にハンガー装置を取り付ける手段として、特許文献１では、把手部（上部フレームを構成する後フレーム）の後面に、ビスでハンガー装置を取り付けることが開示されている。
【先行技術文献】
【特許文献】
【０００３】
【特許文献１】特開２００６－２８０４５４号公報
【発明の概要】
【発明が解決しようとする課題】
【０００４】
さて、把手部は後ろに突出しているため、何らかの理由でハンガー装置に下向きの大きな荷重がかかると、その荷重は把手部の付け根箇所にモーメントとして作用する。このため、特許文献１の構成では支持強度において不安がある。また、特許文献では、把手部にはビス挿通穴が前後に貫通する状態に空いているため、ハンガー装置を取り付けていない状態ではビス貫通穴が露出することになる。従って、オプション品を取り付けていない状態でビス貫通穴を覆うカバーが必要になり、このため部材管理に手間がかかる問題が発生する。
【０００５】
本願発明はこのような現状に鑑み成されたもので、バックサポートの上端に把手部を設けた椅子において、オプション品の支持強度向上や部材管理の手間抑制を図ることを目的とするものである。
【課題を解決するための手段】

【０００６】
本願発明（請求項１の発明）は、背部の後面を構成するバックサポートの上端に、人が手で掴み得る把手部を、前記バックサポートの本体部から上向き又は後ろ向き若しくは両方に突出した状態に設けており、このため、前記把手部と本体部との間は上下に開口した空間になっている椅子において、ハンガー装置又はヘッドレスト若しくは他のオプション品を取り付けるためのオプション品取付け部を、前記空間を横切るように配置しており、前記オプション品取付け部を前記バックサポートの本体部と把手部とに取り付けている。
【０００７】
本願発明は請求項２，３の構成も含んでいる。このうち請求項２の発明は、請求項１において、前記オプション品取付け部の前端又は前端を前記本体部の上端に嵌合させていると共に、前記オプション品取付け部の後端部又は上端部で前記把手部を挟持している。
【０００８】
また、請求項３の発明は、請求項１又は２において、前記オプション品取付け部は前記把手部の後ろにはみ出ており、このオプション品取付け部のうち前記把手部の後ろに位置した後端部に、前記ハンガー装置の支柱を昇降自在に装着している。
【発明の効果】
【０００９】
本願発明では、オプション品取付け部はバックサポートの本体部と把手部とに跨がった状態で取り付けられているため、オプション品取付け部が把手部と本体部とに突っ張った状態になり、従って、ハンガー装置等のオプション品に大きな外力が掛かっても、その外力をバックサポートの本体部で支持できる。このため、把手部の付け根に大きな応力が作用することを防止して、オプション品取付け部の支持強度を格段に向上させることができる。
【００１０】
また、請求項２の構成を採用すると、オプション品取付け部で把手部がしっかりと挟持されているため、支持強度をより一層向上できると共に、把手部にはビス挿通穴のような加工を施す必要がないため、オプション品を取り付けていない状態での美観悪化対策は不要であり、従って、カバー類を無くして部材管理の手間を軽減できる。
【００１１】
オプション品として昇降式のハンガー装置を設ける場合、ハンガーの支柱を把手部と本体部とで囲われた空間に配置することも可能であるが、請求項３のように支柱を把手部の後ろに配置すると、ハンガーが人に触れることを確実に防止できて好適である。他方、オプション品が昇降式のヘッドレストである場合は、ヘッドレストは人の頭を支えるものであるため、昇降用の支柱は空間に配置するのが好ましいと言える（強度の面でもこの方が好ましい。）。
【図面の簡単な説明】
【００１２】
【図１】実施形態に係る椅子の外観図であり、（Ａ）は正面図、（Ｂ）は背面図、（Ｃ）は側面図、（Ｄ）は背部の部分斜視図である。
【図２】（Ａ）は椅子の主要要素の分離斜視図、（Ｂ）は要部の斜視図である。
【図３】（Ａ）は要部の分離斜視図、（Ｂ）は側断面図である。
【図４】（Ａ）は要部を後ろ下方から見た斜視図、（Ｂ）はハンガー装置の分離斜視図である。
【図５】ハンガー装置の一部を後ろから見た分離斜視図である。
【図６】第２実施形態を示す図である。
【発明を実施するための形態】
【００１３】
次に、本願発明の実施形態を図面に基づいて説明する。以下の説明では方向を特定するため「前後」「左右」の文言を使用するが、この前後左右の文言は着座した人を基準にしている。正面視方向は着座した人と対峙した方向であり、従って、正面視での左右と着座

した人から見た左右とは逆になる。

【００１４】

(1).椅子の概略

まず、椅子の概要を主として図１，２に基づいて説明する。本実施形態は事務用等に多用されている回転椅子に適用しており、図１に示すように、椅子は、脚支柱１及びキャスタを有する脚装置２と、脚支柱２の上端に固定したベース３と、ベース３の上に配置した座４と、着座した人がもたれ掛かり得る背もたれ５とを有している（なお、ベース３は上下のカバーで覆われており、実際には、ベース３はカバーの内部に隠れている）。

【００１５】

ベース３の上には、樹脂製の中間部材（座受け部材）６が配置されており、この中間部材６に座４が取り付けられている。座４は、樹脂製の座インナーシェル（座板）とその上面に重ね配置した座クッション材とを有しているが、本願との直接の関係はないので説明は省略する。

【００１６】

図２に示すように、ベース３には背フレーム７が後傾動自在に連結されており、この背フレーム７に、請求項に記載したバックサポートを構成する背アウターシェル８が取り付けられている。図２（Ａ）から把握できるように、背フレーム７は、略前後方向に延びる左右のサイドアーム９とその後端に一体に繋がった左右横長のリア部１０と、リア部１０の後端から立ち上がった背支持部１１とを有しており、この背支柱部１１に背アウターシェル８が取り付けられている。本実施形態の椅子はロッキングに際して座が後退しつつ後傾するシンクロタイプであるが、説明は省略する。

【００１７】

椅子は、背アウターシェル８の前面に背もたれ４が取り付けられている。図１に示すように、背もたれ４は、樹脂製の背インナーシェル１２の前面にクッション１３を張ってこれを表皮材１４で覆った構造であり、背インナーシェル１２が複数の係合手段で背アウターシェル８に取り付けられている。

【００１８】

背アウターシェル８の上端には、本体部８ａから斜め後ろ上向きに突出した把手部１４が一体に形成されており、従って、把手部１４と本体部８ａとの間には空間１５が空いている。把手部１４は平面視では後ろ向きに突状に緩く湾曲しており、背面視では上向き突状に緩く湾曲している。そして、本実施形態では、オプション品の一例としてのハンガー装置１６が、把手部１４を利用して取り付けられる。この点を次に説明する。

【００１９】

(2).ハンガー装置

図４から理解できるように、本実施形態のハンガー装置１６は、空間１５を手前から上下に跨ぐように配置された第１サポート部１８と、把手部１４に後ろから重なってメインサポート部１８の上部に重なる第２サポート部１９と、第１サポート部１８及び第２サポート部１９の背面部に嵌め込み装着された重なった第３サポート部２０と、第１～第３サポート部１８，１９，３０に対して昇降自在に装置されたれた正面視略Ｔ型のハンガー体２１とを備えている。第１～第３サポート部１８～２０は、請求項に記載したオプション品取付け部の一例を構成している。なお、図１（Ａ）ではハンガー体２１を上昇させた状態を表示し、図１（Ｂ）ではハンガー体２１を下降させた状態を表示している。

【００２０】

第１サポート部１８の上端には把手部１４に前方及び上方から嵌まる（重なる）上顎部１８ａを形成している一方、第２サポート部１９は把手部１４に下方及び後ろから重なるブロック状の形態を成しており、図５に示すように、第２サポート部１９に後ろから挿通したビス２３を第１サポート部１８にねじ込むことにより、第１サポート部１８と第２サポート部１９とで把手部１４が挟持される。なお、第１サポート部１８には、ビス２３がねじ込まれるナット（図示せず）を内蔵している。

【００２１】

図３に示すように、第１サポート部１８の下端には、背アウターシェル８の本体部８ａの上端縁２４に嵌まり込む嵌合溝２５が形成されている。本体部８ａの上端縁２４は前向き鉤状の逆Ｌ型の断面形状になっており、このため、嵌合溝２５も逆Ｌ型の断面形状になっている。このため、第１サポート部１８は本体部８ａの上端縁２４にしっかりと嵌まっている。

【００２２】

図３（Ａ）に示すように、本体部８ａの上端縁２４のうち、背アウターシェル８の縦長中心線を挟んだ左右両側に下係合穴２４ａを空けている一方、第１サポート部１８の下端後面には、下係合穴２４ａに嵌まる下係合突起（図示せず）を設けている。また、同じく図３（Ａ）に示すように、把手部１４の左右中間部に、前向きに開口した上係合穴１４ａを形成している一方、第１サポート部１８の上顎部１８ａには、上係合穴１４ａに嵌まる上係合突起（図示せず）を形成している。

【００２３】

これら係合穴２４ａ，１４ａと係合突起との嵌まり合いにより、ハンガー装置１６は左右ずれ不能に位置決めされる。係合穴と係合突起との位置決め手段は前後逆に構成してもよい。また、位置決め手段は上下いずれか一方のみに設けることも可能である。

【００２４】

また、本体部８ａのうち上端よりも僅かだけ下方の位置にアッパリブ２６を前向きに突設しており、第１サポート部１８の下端がアッパリブ２６に載るように設定されている。このため、第１サポート部１８に前向きの外力が作用してもこの外力はアッパリブ２６で支持される。従って、ハンガー装置１６は後ろからの外力に対して高い抵抗を発揮する。また、アッパリブ２６が存在することで本体部８ａの上部は曲げに対して高い剛性を有しており、上端縁２４は容易に曲がり変形することはない。この面においても、ハンガー装置１６は高い支持強度を保持している。

【００２５】

例えば図４（Ｂ）に示すように、ハンガー体２１の支柱２７は前向きに開口しているが、開口部は左右内側部に内向きリップ２７ａを設けた蟻溝２８になっている。他方、第１～第３サポート部１８，１９，２０の後端には、支柱２７の蟻溝２８に嵌まる外向きフラップ２９を形成している。このため、ハンガー体１６は上下動は可能で前後左右に離脱不能に保持される。第３サポート部２０の外向きフラップ２９は、第１サポート部１８の外向きフラップ２９と第１サポート部１８の外向きフラップ２９との間に位置している。従って、第３サポート部２０は第１サポート部１８と第２サポート部１９とに跨がった状態で嵌まっている。

【００２６】

ハンガー体２１における蟻溝２８の内底面には、ハンガー体２８の上向き抜けを阻止する下部突起３０と、上昇させたハンガー体２１が下降しないように保持する上部突起３１とを設けている。他方、図５に明示するように、第３サポート部１９には下向き舌状のキャッチ片３２を設けており、キャッチ片３２に、下部突起３０が下方から当たる下部爪３３と、上部突起３１が上から当たる上部爪３４とを設けている。キャッチ片３２は弾性に抗して上端を中心にして前後に回動するようになっており、手前に引き曲げると下部爪３３を下突起３０から離脱させてハンガー体２１を抜き外すことができる。

【００２７】

第３サポート部２０は、第１サポート部１８及び第２サポート部１９に設けた後ろ向き開口の凹所３５に嵌まっており、上下方向及び左右方向にずれ不能に保持されている。また、第３サポート部２０の左右両側部に前向きの撓み係合爪３６を設ける一方、ベース部４１における凹所３５の左右内側面には、撓み係合爪３６が弾性に抗しての変形によって係合する係合突起３７を設けている。

【００２８】

第１及び第２サポート部１８，１９と第３サポート部１９との間には、弾性体の一例としてのゴムブロック３８が介在している。このため、第３サポート部１９の左右両側部（

フラップ２９）の後面がハンガー体２１の支柱２７に突っ張っており、その結果、ハンガー体２１はガタ付きのない状態に保持されている。

【００２９】

(3).第２実施形態

図６ではより現実の高い実施形態を示している。この実施形態は基本的には第１実施形態と同じであり、そこで、第１実施形態と共通した要素は同じ符号を付して説明は省略する。基本的な相違として、第３サポート部１９は第２サポート部１９に装着されている。第３サポート部１９の構成は第１実施形態と同じであり、第３サポート部１９と第２サポート部１９との間にゴムブロック３８を介在させている。

【００３０】

また、この実施形態では、第１サポート部１８と第２サポート部１９とは上下箇所において嵌まり合うようになっている。そこで、第１サポート部１８の上顎部１８ａに後ろ向きに開口した上嵌合穴４０を形成し、更に、この上嵌合穴４０の左右内側面に蟻溝部４１を形成している一方、第１サポート部１８の上嵌合部４０に嵌まる上突部４２を形成しており、この上突部４２の左右両端部に、上嵌合穴４０の蟻溝部４１る嵌まる蟻ほぞ部４３を形成している。

【００３１】

更に、第１サポート部１８の下部に横向きH形の下嵌合穴４４を形成している一方、第２サポート部１９には、下嵌合穴４４にきっちり嵌まる横向きH型の下突部４５を形成している。このように第１サポート部１８と第２サポート部１９とは上下において嵌まり合っているため、一体化したのと同様にしっかりと重なり合っている。

【００３２】

そして、第１サポート部１８における下嵌合穴４４の下内面に前後長手の逃がし溝４６を形成し、この逃がし溝４６の奥部の箇所に下向きに開口した下係合穴４７を形成している一方、第２サポート部１９のうち下突部４５の真下の箇所に、手前に向けて延びる下係止片４８を形成し、この下係止片４８に、下係合穴４７に嵌まる下係止爪４９を形成している。

【００３３】

従って、第２サポート部１９を第１サポート部１８に対して嵌め込むと、下係止片４８がいったん撓み変形してから戻ることで下係止爪４９が下係合穴４７に嵌まり、これにより、第２サポート部１９は第１サポート部１８から離反不能に保持される。第１サポート部１８と第２サポート部１９とは把手部１４を挟んだ上下においてきっちり嵌まり合っているため、１つの係止爪４９と係合穴４７との嵌まり合いのみでも、ハンガー体２１をガタのない状態にしっかりと保持できる。すなわち、ビスを使用することなく、ハンガー装置１６を背アウターシェル８の簡単にしかも強固に取り付けることができる。

【００３４】

分図（Ｂ）に表示するように、第１サポート部１８には、把手部１４の上係合穴１４ａに嵌まる突起５０を形成している。下係止片４８の先端部を指先又はドライバ等の細い部材で上向きに押すと、下係止片４８は撓み変形して下係止爪４９は下係合穴４７から離脱する。従って、ハンガー装置１６を取り外すことができる。

【００３５】

(4).まとめ・その他

以上のように、いずれの実施形態においても、ハンガー装置を構成する第１サポート部１８と第２サポート部１９とが把手部１４は本体部８ａとの間に突っ張った状態になっているため、ハンガー装置１６は極めて高い支持強度を有しており、下向きや前向きの大きな荷重が作用しても、把手部１４の付け根が簡単に破損したり、ハンガー装置１６が破損したり簡単に外れたりすることはない。

【００３６】

両実施形態のように、第１サポート部１８と第２サポート部１９とで把手部１４を挟持すると、固定強度を一層向上できる利点がある。第２サポート部１９も把手部１４と本体

部８ａとに跨がる長さとして、本体部８ａの上端縁２４を第１サポート部１８と第２サポート部１９とで挟持することも可能であり、この場合は固定強度を更に向上できる。

【００３７】

本実各実施形態では、３サポート部１９は第２サポート部１９とハンガー体２１の支柱２７との間に隠れていて外部からは見えず、また、第１及び第２のサポート部１８，１９と支柱２７との左右横幅は略同じになっているため、第２サポート部１９の背面は外から全く見えない。このため、嵌め合わせのための部分が人にに触れることはなくて、美観に優れている。また、第１及び第２のサポート部１８１，１９と支柱２７とが略同じ左右幅であるため、全体として一体感があり、この面でもデザイン的に優れていると言える。

【００３８】

本願発明は、上記の実施形態の他にも様々に具体化できる。例えば、バックサポートは必ずしもシェル状である必要はなく、特許文献１のようなフレーム構造品とすることも可能である。また、背板のような背もたれの構成要素をバックサポートとすることも可能である。背アウターシェルで身体を直接に受けたり、背アウターシェルにクッションを設けたりすることも可能である。ハンガー装置やヘッドレストは、高さ調節できない固定式であってもよい。

【産業上の利用可能性】

【００３９】

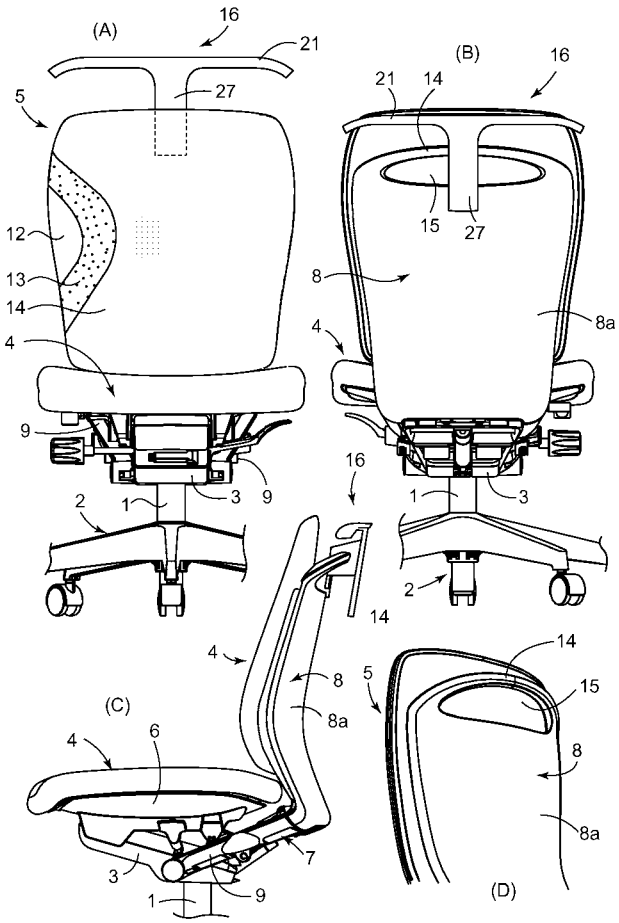
本願発明は椅子に具体化することができる。従って、産業上利用できる。

【符号の説明】

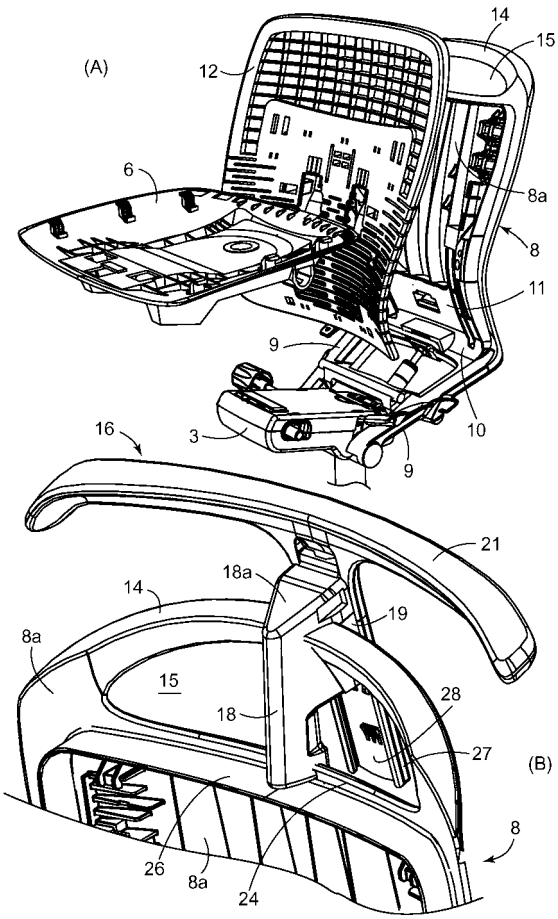
【００４０】

６　背もたれ
８　バックサポートの一例としての背アウターシェル
８ａ　背アウターシェルの本体部
１２　背もたれを構成する背インナーシェル
１４　把手部
１５　空所
１６　オプション品の一例としてのハンガー装置
１８～１９　オプション品取付け部の一例であるサポート部
１８ａ　上顎部
２１　ハンガー体
２６　アッパリブ
２７　ハンガー体の支柱

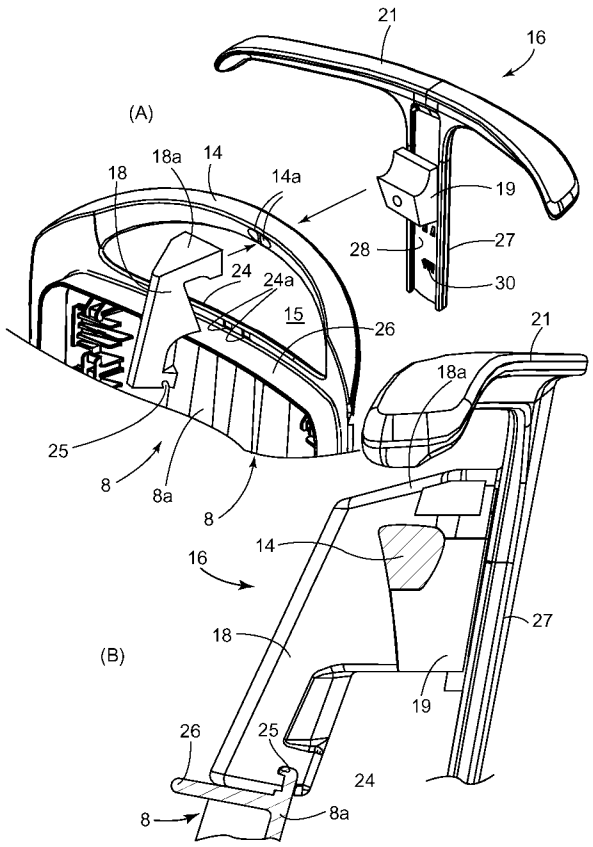
【図１】



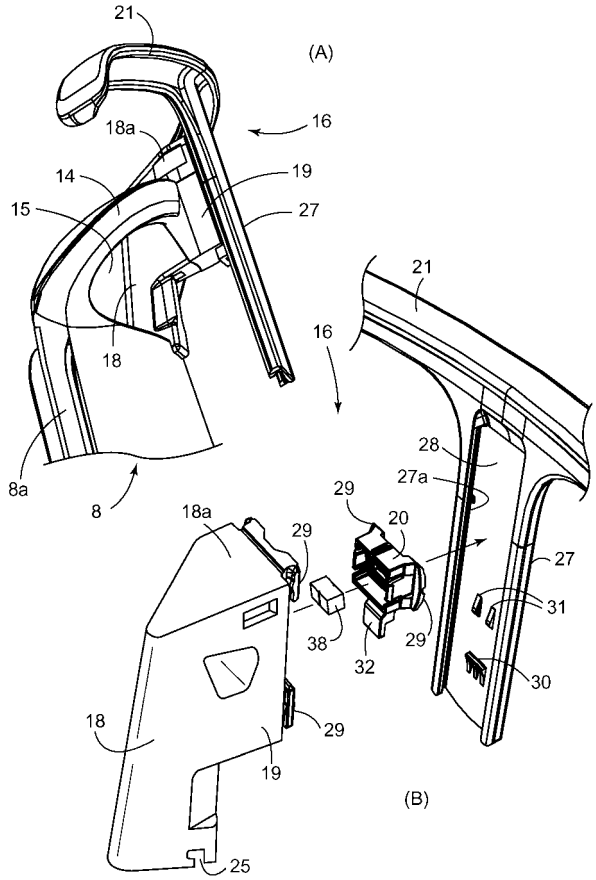
【図２】



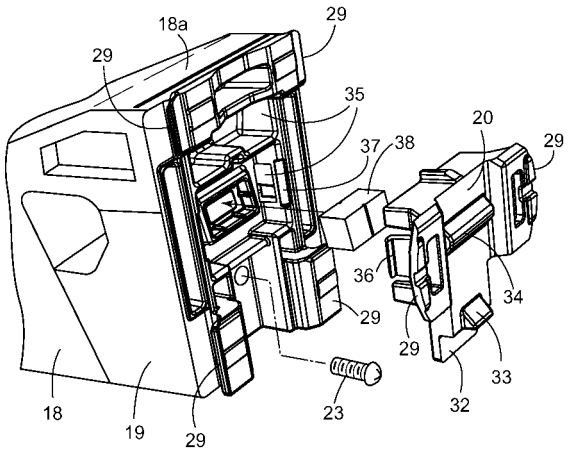
【図３】



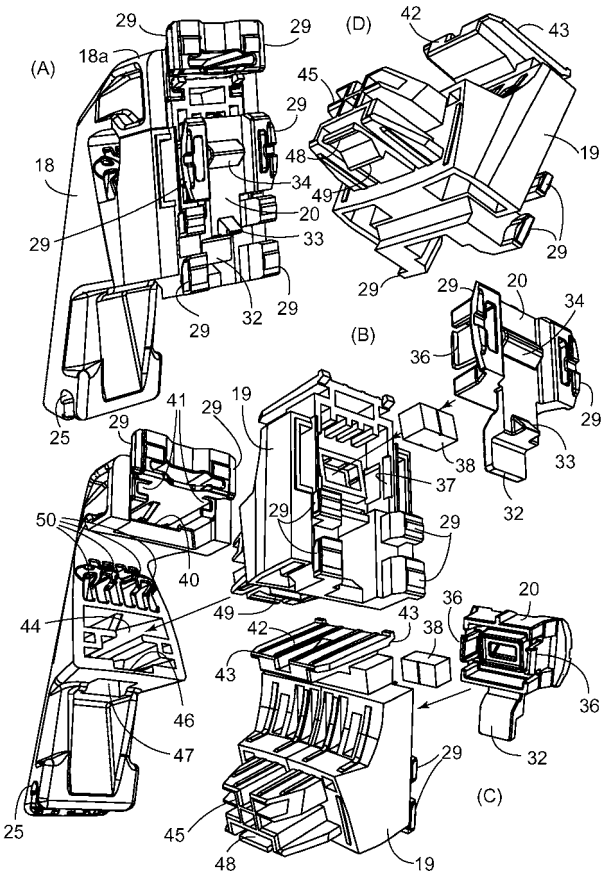
【図４】



【図５】


18a
29
29
35
37
38
20
29
36
34
29
29
33
32
23
18
19
29

【図６】


(A)
(B)
(C)
(D)
29
18a
18
25
42
43
45
19
48
49
34
20
33
32
36
41
50
40
44
46
47
38
37